
アシスト

マジック・ジョー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アシスト

【Nコード】

N1006A

【作者名】

マジック・ジョー

【あらすじ】

世間からちやほやされていた『天才』と、影に埋もれながら努力してきた『天才』とのバスケ1ON1がはじまりそして同じ学校に入った。

第一話『天才』の不満

俺の名前は沖田^{おきた}譲二^{じょうじ}。小学6年。俺は周りから『天才』だとか言われてちやほや

されていた。その『天才』というのはバスケがらみである。親父の強制で、1歳からすでにバスケットボールに触っているのだ。そして毎日1ON1を親父とやってきた。そして小学4年にミニバスケットボールクラブに入りいきなりレギュラーをコテンパンにしてスタメンに入った。

そして5年までは県大会どまり、だが小6のとき全国大会に行き、月間バスケットと言う雑誌に、『100年に1人の天才。チーム72得点中42得点15アシスト』と書かれ、『天才』といわれるようになった。つまりチーム得点すべてにかかわったってことだ。

だけど、いきなり転校することになった。でも嬉しかった。なぜって？弱いチームから抜かれるからってのもあるけど俺は欲求不満だったから。その不満は、自分で得点して勝ってたけど本当は、アシストをやりたいからなんだ。アシストってのはパスをして受け手がシュートして入ったらアシストになる。なぜやりたいのかは、マジック・ジョンソンと言うNBAのものすごいアシストをした選手でその人に憧れてるから、だからその不満を解消してくれる受け手がいるかもしれないから。

引越しの車の中から、親父が「ここがお前が行く中学だぞ。」その中学は新しく名前は風ヶ丘^{かぜがおか}中学引越し先の小学校はもう春休みに入っていて、友達も何もなく中学に行く。

「さあついたぞ！ここが今日から住む家だ！」外見は普通だが、1つ違うのは庭にオールコートの庭があることだった。俺は早速シユ

ートを打ち始めた。今までは親父とやっていたが、もう相手にならなくなったので最近では自主トレにしている。

しばらくすると、近くに住んでいると思うやつが話し掛けてきた。

「お！引っ越してきた人だな？俺もバスケットやってるんだ　結構うまいなー？でもシュートフォームの手首にクセがあるな？直した方がいいぞ」いきなり話し掛けてきただめだし？ふざけんなと思ったけど疲れていた家で戻った。

「おいおい！シカトか？人がせつかくアドバイスしてやってんのに」がシャー！やつが言い終わると同じにドアを閉めた。シャー「おいおい。カーテンまで閉めるか？普通」俺はムシヨーにイラついた【確かに俺はクセがあるよ！でも何でてめーに言われなくちゃいけないんだよ！全国にもいなかったやつに！下手なんだろ！ふざけんな！】イラつきながらもベツトにはいった。

翌日

「おい！譲二」「なんだよ親父！」「…なにいきなりキレてんだよ？まあいいや俺じゃ相手になんねーからな。ここ、いつてみるよ」BLの最近引退した選手いるってさ、バスケット教わってきたら？」

そういつて渡されたのは地図らしい。でも確かそれだったら近くの神社だったよな？いつてみるか。

その後昨日のやつをコテンパンにしてやる。だが近くの神社だからって甘く見た。考えれば昨日初めて来た場所だ。やっぱ地図見ようもってきてよかった。ちよつと親父に感謝と思ったが、すぐに憎しみに変わった。渡された地図は世界地図だった！細かいのをよこせ！そう思った。

ぼん！「やあ！」突然肩をたたいて話し掛けてきたのは昨日のやつだった。「覚えてる？」「ああ、覚えてるさ！いきなりダメだしして来たムカツク奴だってな！どうせたいしてうまくないんだろ？」と言いだんと押した。だが押した手は相手の体にくっついたままだった。「おいおい！暴力反対！」俺はまた屈辱を受けた。自分は力

がある方ではないが、ない方でもないからだ。「神社を探してるんだろ？案内してやるよ。」「あ？何で知ってたんだよ！」「ぷっ！だつてさつき一人で大声だしていったジャン」確かにそうかもしれない。せも、こいつに道を案内されるなんてしゃくだからな。「おいおいだんまりかよ？だつたらおいてくぜ？」！！！！「イヤそれは困る案内してくれ」「いいけど、人に物を頼むときには、礼儀つて物が必要だろ？」「……お願いします」「っはははっは。よろしーって言つてもこれからおれがいく場所と同じなんだけどね。」「

「あんた、沖田譲二つて言うんだろ？」「！何で知ってるんだ？」「県大会であたつた風神^{かぜかみ}つて覚えてるか？」「ああ、62対22で勝った所だ」「そこにいたんだ。つても怪我で出てなかったけど。いいか？俺がいたら風神は3倍点数が上がるんだよ！だから俺が怪我じゃなかったら勝つていたんだ。そして今の俺とオメーは逆の状態だつたんだよ。」「ふん！それはないね。たら、れば、の話なんて聞きたくねーよ」「着いたここだぜ」その神社の長い階段を上がると古びた神社としっかり整備されてるストリートバスケのコートがあつた。

ガランガラン「おーい。おっちゃんいるかー？」奴が神社の鈴を鳴らし誰かを呼んでいるようだ。奴？そういえば名前聞いてなかったな。

古びた神社の中から30から40ぐらいのおっさんが出てきた。バキ！「こら！尚樹^{なほき}神社の鈴で呼ぶな！それに俺は42歳だおっちゃんじゃない！死んだお前の親父の三上^{みかみ}さんはいいい人だつたんだぞ！」「おいおい。俺はダメな奴つてことか？それは」「ふん！とこで誰だ？あいつは」

「あー昨日引越してきた沖田譲二つてやつだ。」「話に入れねーなーでもあいつ。三上尚樹つて言う名前なのか。」「おい！その譲二！尚樹と1ON1やつてみる」！！【別にイーけどいきなり呼び捨てしてしかも命令かよ】「まーいいぜ」こうして何か無理やりなところもあるけど三上尚樹と俺の1ON1が始まった。

・仲間として

【三上尚樹、昨日俺にダメだししやがったからな、実力見してもら
うぜ】と譲二の考え。

【沖田譲二、俺はお前より強い、俺は努力してきたんだ！誰よりも
と尚樹の考え。

「はじめるぜ？沖田」「かかって来い。三上」「ふふ、世間からも
『天才』と言われ、脚光を浴びてきた譲二と、陰にいながらもその
実力は譲二並の『天才』だろうと思う尚樹。譲二の試合は全国で見
たことがあった。尚樹は普段から。いい試合が見れそうだ。」「先
攻、後攻は？」「おっちゃん、ジャンプボール上げてー！いいよな
？」「ああ」尚樹がおっさんにボールを渡す。「いくぞ？半分から
少しでも出て飛ばした方の勝ちだぞ。」「OK×2」二人の声が合
わさった。「そりゃ」ボールが高々と上がる。二人同時にジャンプ
をする。バシィー！ほとんど互角だった。だが、ボールは俺の後ろ
にいった。「俺の勝ちだな」先攻は尚樹に決まった。尚樹がボール
を持つ。俺も腰を低くしディフェンスの構えをする。クツ。「シユ
ートか？いや、フェイクだ」ダッダン尚樹が右にドリブルを開始。
ギユ。「え？」たった一步で尚樹はレイアップシュートに行く（一
番使われやすいゴール下の近くでランで行った時いくシュートのこ
と）尚樹がシュートに行つてジャンプすると同時に俺もジャンプし
て、シュートブロックに行く。ボール、手に届く、「行けるー！」
ボールに触れかけた瞬間ボールが落ちる。尚樹はクラッチを入れた
のだ。（ボールを上まであげ戻してまたシュートに行くテクニク）
スパ完璧だった。「おいおい、行ける？なにが？」カー俺はむかつ
として、自分のオフエンスで、取り返そうとして、同じシュートを
したが、バシィー「余裕だぜー？沖田譲二！」「なんだと？」「う
ーん。尚樹のほうがすこし上のようなが？譲二が手加減しているよ

うにも見える】2 - 0、2 - 1、2 - 2、4 - 2、6 - 2、「おい
おいどうした！沖田？6 - 2だぜえええ？さっきの勢いはどうした
？」「おい、三上。そんなにチョーしに乗って後で後悔すんなよ？
今からマジになってやるから。」「沖田。今のははったりか？はつ
たりじゃなきゃ嬉しいぜ。この三上尚樹が知っているあんたは、そ
んなによくないからね】ダン、譲二はボールをもらい直ぐにドリ
ブルを開始。ダンダツ「よしコイ！沖田あー」右か？左か？きゅ
つきゅつきゅつきゅつきゅ。譲二はサイドステップをしながら体を
左右にふる。「な！」「簡単に抜かれた！！？やばい。」「譲二はジ
ヤンプシュートに行った。「おいおい！お前のシュートニヤあクセ
があんのわすれた？簡単にブロックできるぜ？」！！！！クセが、
ない！！スパ「ふん！簡単だね」「こいつ！さっきのは本当にはつ
たりじゃなかったのか？」「てめー、昨日のクセは？」「ふん！て
めーに言われる前から直してたんだ。で、今日で直しきつた」「次、
おめーのオフエンスだぜ」尚樹はむきになってやり返そうとするが、
簡単にスティールされた。【！まじかよ？】その後も、点差が縮ま
っていく。「くそオー」「6 - 6。」「ザツガシュ」「7 - 6」スパ「
8 - 6。どうした？そんなもんかよ？」「くそ！俺じゃねーみて
だ強えーこいつは！けどよ、このままじゃいけねエーよ。】尚樹
がボールを持つと直ぐにダツシュしゴールを狙った。【ふん！三上
！確かにお前はうまい！だけどこれで終わりだ。ブロックしてやる。
】【ダメかブロックされる。！おいおい俺はあきらめーんだよ！！】
ぐーん「な！なんだこのジャンプは？」ザシュツ【すげ ジャンプ
だ。こいつなら、俺のアシストに答えられるかも】「はあはあ8 -
7だ．．．ぜ」「そこまでええ！！！！」「あゝ？何言ってるんだお
っちゃん

？まだ終わってねーよ？」「いい！！この続きは中学で進化してか
ら魅してくれ！」「は？ふざけんなよ？俺は三上をぶったおすんだ
よ！」「はっはっは！戦い競うのもいいが、競って強くなり仲
間 として相手をぶったおすのもいいと思わね か？」「そこでだ！

お前らミニバスを卒業してるが、最後の引退試合として申し込んでいた。相手は、譲二。お前が全国で敗けた。小佐久^{こさく}ミニバスケットチームだ！」「はあ？意味不明なことってんなよ！」尚樹が反論した。「そうか？お前のシュートと、俺のアシスト。楽しいと思うけどな？」こうして、引退試合が行われることになった。

SF 沖田讓二！

「おっさん！」「馬鹿たれ！おっさんじゃない！俺は津堂圭吾だ！」
とごん！と一発殴られた。「つーか、今初めて知ったんだよ。」と
つぶやくとまた一発バキイと殴られる。「じゃあ、津堂さん。何で
呼んだんだ？」讓二が尋ねると「おう！お前のユニフォームだ！」
受け取ったのは結構新しいと言うより新品の7番のユニフォームだ
った。「本当にやるのか？」「ああ、明後日だからな、もうじき尚
樹がくるから、案内してもらって、ミニバスチームと馴れとくん
だぞ。」階段を駆け上る音が聞こえる。「尚樹がきたんじゃねーか？」
だが、駆け上がったきたのは尚樹じゃなかった。

「はあはあ。お前が三上尚樹か？」そいつは讓二に指差して聞く。
「いや、俺は違う」「な？じゃあ誰だつてイ．．．」どん。そいつが
言い終わる前に尚樹がきて押して倒れる。「おいおい。じゃまだぜ
？そこ。」「いきなり何すんだつてざけんなよ！」「んだよ？そん
なとこにいるお前が悪いんだろ？」「まあまあちよつと待て。」「喧
嘩寸前の二人を津堂さんがおさえる。「ところで君は誰だ？」「俺
か？俺は小佐久のエース。宇野誠也だ！今度の試合の風神のエース
三上尚樹！シヨーぶ！！」と叫ぶ。「変な奴！俺は勝負なんてしね
よ！ばーか」が ん。誠也はちよつとシヨツクだったらしい。「
だったら覚えとけ！お前にマークしてぼこにしてやる。」「と叫
ぶとまた駆け下りていった。「あわただしい奴だな」と津堂さんが
言った。「おい沖田！」「あ？」「あんな奴いたのか？」「ああ、
いたよでもエースは違う奴だ。でも、小学生のシュート力じゃねー
ようなものすつげーシューターだったよ。」「ふーん。まあいいや、
沖田いくぞ！ミニバスチーム。」「と行く事になって体育館につく。
尚樹が、「これがチームだ。」「そこにいたのはわずか3人だった。
」「なんだ？これは？」「うーんとね、5年3人と俺達。みんなやめ
ちゃったのねだから風神自体。引退みたいな？」「いやみたいな？じ

やね よと思つた譲二だが仕方ないらしく。尚樹が一人一人紹介する。「こいつは、でけーだろ？うちのセンターだったんだ。」「こんにちは。^{にしま}西間健二^{けんじ}です。」「こいつらはうちのガードの二人。双子なんだ。」「おうよ！俺は鹿島竜也！」「同じく。勝也。」「よろしく！x2」「まあこの5人だ！」と尚樹が言う。「じゃあ、フォーメーションの確認するか？」尚樹が言つてつて決まったのが、P G鹿島竜也。^{シューティングガード} S G鹿島勝也。^{スモールフォワード} P F三上尚樹。^{パワーフォワード} C西間健二。^{ポイントガード} これに決まるには少し波乱があつた。それは、「おい三上！何で俺がS Fなんだよ！P Gだろうが！」「おいおい。この双子の事考えろよ。二人とも150ダゼ？Fは無理だろう？」「ふん！俺は納得しねーぞ。」「言い合いになっているときに、津堂さんが「まあいいじゃねーか。それにお前がP Gになつてもアシストしきれるのは尚樹だけだ。だつたら得点できるS Fで尚樹のアシストした方が魅力的だと思ふけどな？」といったので仕方なく了解した。そして、試合の日が来た！

俺が決める。

ジャンプボール。「尚樹が飛べ」という監督の指示。まあ監督と言っても、津堂さんだけど。

ピイ 「両チーム整列してください。」「いいか？三上。あの4番がエースと言えるポストプレイのうまい奴だからな、きをつける。シューターには俺がつく」「了解」ピー。ジャンプボール。ボールが宙に舞う。バシイ尚樹が勝った。「あー！」運悪く相手がボールを保持。「宇野！！」ボールを持った5番が6番の宇野にパスを出す。バシイ「なにー7番！何でお前なんだ！三上じゃねのか？」なんて言いながらシュートを打たれた。「ふん！はいんねよ！」だが、宇野のきれいなシュートフォームから放たれたボールはリングに吸い込まれるかのように入った。シュパ「きれーなフォームだなー」と何故か感心する津堂。Gの双子がボール運ぼうとする。「え？」「な？」双子の兄弟は驚いた。「いきなり、オールコートマンツードと？」「体力に自信があるのか？」と観客がわめくだがさすがに双子。うまいコンビネーションでボールを運ぶ「勝！」シュ・パン「竜！」シュ・パンこのあたりは見事だ。その間に誠也が話し掛けてきた。「おい。余所見すんなよ？三上にはつけないがお前にプレイはさせないぜ？」「ふん！やってみる。」と言いつつ「へい！パス」バシイ譲二にパスがとうる。その瞬間フツ「あつさり抜かれた！」だが4番が俺の前に直ぐにカバーに入る。が、スーパシイ。見事なパスだった。尚樹にとりざシュツ簡単に決めたのだ。この二つのプレイが2チームともに火がついた。県大会と全国その差がなくなったように試合が進む。前半残り1分。勝也から譲二にパスが渡り尚樹へのアシストがまた決まる。そこで誠也が気付いた【今のパスだし】もういちど、譲二 尚樹のアシストが決まる。【やっぱし。】誠也は確信した。ハーフタイム。「よっしゃーこのまま勝てるぜ」と尚樹が叫ぶ。「それはどうかな？」譲二がつぶや

く。

小佐久の監督「おい！どうした？全国にいったチームだろう？あんなチーム42-43なんて！」誠也の口が開く「いや、7番と4番の沖田譲二と三上尚樹。あの二人は全国レベルです」「じゃあ、どーすんだ？」「大丈夫。あの二人の個人プレイはすごいが、あんまり経験がない。タイミングが同じだ。そこを狙ってカットするんだ。後は俺が決める。」ドン！と言い張る。ピ―後半開始！

アシストなしで行こう

後半開始。「なあ沖田？さっきどうか？とか言ってたけどなんかあるんか？」「ああ、すぐにわかるさ。どうしようもないキヤリアの壁。たぶんそこを狙ってくるよ。」「はあ？意味わかんねーよ。」「ピイー！最初にボールを保持したのは譲二。」「もうやられないよ！あんたがどんなに上手くても。俺が止めてやる！！」「きっぱり言い張る宇野。」「ふん！俺を止められんのは三上だけだぜ。」「バツダン。」「チツくそ」今度はあつさり抜かれずに喰らいつく宇野。いや、喰らいつくどころが追い詰めていく。」「譲二君！」「竜也が追い詰められてるのを見てボールをもらいに来た。」「ふーナイス！」と言つて落ち着いたフェイクをかけ一気に抜くダン「あ！しまった」宇野が叫ぶが、やはり4番がカバーに来了。だが譲二はシュートをうとうとする。が、「！！なッ」「もうやられねー！」「宇野がシュートブロックに来了。【さっき抜いたのに、なんて瞬発力だ】だが譲二はその瞬間。尚樹にパス、が、ステイルされた。」「しまった。」「ステイルした4番はすかさず「誠也ああ！」「シュ・バン。キユ宇野がシュートにいった。シュパツ。」「おつシャあー！」「宇野が叫んだ。シュートはこの試合一番いい弧を描いてはいった。」「くそ！やられたな！沖田のパスはよかったんだけど」尚樹が言うが俺は「いや、完璧で良すぎたんだ。」「はあ？よかったらカットなんてされねーだろ？」だが、このまま波に乗った小佐久は宇野を中心に得点を重ねる。気が付けば46・56の十点差で負けていた。ピー「タイムアウト！風神！」意気消沈してベンチに戻る。」「だーくそパス完璧に見破ってるよ。」「尚樹が叫ぶが、津堂さんが、「うーんこればかりは仕方ないからな！。こうなったら、アシストなしで行こう！」「え？んでもアシストがないと。」「と譲二が言うが、「いやだから、ポジションどうりのセオリーで行くんだ。竜也と勝也がリードして皆で得点しよう！」「ピー「タイムアウトが終わったの

で選手はコートへ！」納得はいかなかったけど、津堂さんの言うとうりにするしかなかった。「おい！十点差だぜどうすんだよ？」宇野が譲二にいやみを言うが、譲二はシカトをしていた。いや集中仕切っていた。「はい！」この試合で初めて、健二、勝也、竜也がオフエンスにかかわる。「ハイポスト入ったーチェック！」「行けー健二ー」だんだん！健二は5年と思えないパワープレイであいてを吹っ飛ばすクルツ。シュ。バス！「おっシャーナイス！」が、すぐに宇野が3Pを打ってくるガンツ「はずしたありバウンド」ゴール下でリバウンドの取り合い！バしい！！勢いをよくとったのは尚樹。「おし！速攻！沖田あー」ぶんつぶオーバシイイイ「【いつてーなんちゅーベースボールパスなんだ！】」「おい！もう抜かれねーよ！」宇野が前に立ちばかる。「ふん！1つ忘れてんぜ？」「な？」譲二は3Pを打つ。決して宇野のように上手くはないが決まった。ガンツがん、すぽ。「おし。5点差！」残り1分。小佐久の7番がシュートを放つ。が外れる！パン健二がリバウンドを取った。「勝也君！」シュツパン「竜！」ぱし二人で運びシュートを決める。【相手の5番のボール出しの相手の8割は、4番！】譲二はパスを呼んでカット。「沖田！」尚樹が来た俺もパスをする。バシイ！なんと尚樹も3Pを打つ。シュツ！バシュツ決まったー「同点だー！」だが宇野がすぐに勝負を仕掛けるが、宇野が初のミス。ルーズボールを勝也が取る。無我夢中でパスを出して俺がボールを持った。ジャンプシュート。スパツ。「よッシャー。」残り5秒。譲二達は勝ったと思ひ浮かれた瞬間。4番がパスをだし宇野に渡る。「逆転にはこれしかねえ」3Pを放つ「しまった」きれいな弧を書いていた。

12本中10本

「しまった！」宇野のシュートはきれいな弧を描く。スー・ガン
つがながくるくる。ボールはリングの上で回っていた。ボールが止
まるスー・だんっだんだんだ。ピーイー「試合終了！両チーム整
列。」両チーム整列する。審判が「58-56で風神の勝ち！礼！」
「ありがとうございます！」

宇野シュートは外れた。悔しそうにする宇野を見て津堂さんが「悔
しがっているが、奴のシュートは12本中10本というすごい確立
なんだけどな。」確かにそうだった。俺は見事に奴のシュートを止
められなかった。「おい！三上と沖田！試合には負けたが勝負には
負けてねえぞ」と宇野が叫ぶ「で？負けてねーからなんだよ？」と
三上が嫌らしく言う。「ぐっ！言うつもりはなかったんだが、今度
引っ越してな、風ヶ丘に行くことになったのだ！だからそこで勝負
だ」驚いたがすぐにダッシュで帰った。「ふーん。あいつも同じ学
校かあー」と尚樹が言う。「ふん！だったらおもしれーチームにな
るじゃねーか。」この譲二の言葉に津堂は思った【とっさの譲二が
言った言葉だったが、本当にそうだったら面白いどころじゃないか
もな】「よし。今日は俺のおごりだなんか食いに行こう！」「やつ
たーさすが津堂さん！」「よし！ここにしよう！」「ついたのは焼肉
7人以下で20人前食ったら無料の場所だった。「なんでここ？」
と譲二が尋ねると「尚樹がな」と一言津堂さんが返す。その後尚樹
が1人で10人前食べた。なんでも前に津堂さんがおこったときに
破産したらしい。そして譲二達は

ー入学式ー

「はあああ式って本当にやだねー長いし」と尚樹が言う。「ふん！
だから冷静さに欠けるんだばーか」

譲二と尚樹そして誠也の三人は見事に同じクラスだった。だが事件がおきた。事件と言うより譲二、尚樹、誠也のボケだった。なんとバスケット部が存在しなかった。「おいおい。バスケット部が存在しねーなんて聞いてねーよ」と尚樹が言うが誠也が「いやいや、お前知ってるよ！一番この中学に詳しいんだから」「あ？しらねーよボケ！」「なんだとー」ドカドカバコバキ【そういえばこいつら、よく喧嘩すんなー？でもバスケット部がねーとわなーそう思わなかったし】と譲二が考えながらふらふらと何処かに行った。「ん？譲二イねーよ」「喧嘩をしていた尚樹が気付く。「てめーのせいだろうが！」宇野が言ってまた喧嘩をしだした。ところで譲二が行ったのは校長室。

私が作りましょうか？

こんこん！讓二はノックをして校長室へ、「失礼します。1年3組の沖田讓二と言います。校長先生に用があつて来ました。」そこにはザビエルのように上げた校長先生がいた。「ん？何だね入学早々。」讓二はスタスタと校長先生の前へ「先生！バスケットを作ってください！」「なっ！ごほっごほ」と驚き咳き込む校長先生。「ごめんねーよく聞こえなかったよ。もう一度言ってくれないか？」「いや、だからバスケットを作ってください。」きっぱり言う讓二。だがこの校長先生ある事件が理由でバスケットを作らないらしい。「いや、だめだ、だめだ！バスケットは作らん！」理由はわからないがいきなり怒鳴ってきたので、讓二は怒鳴り返して反論した。「なんでだ！女子はあるじゃないか！ふざけんな！」「む、なに？」讓二はつい勢い余つて言つてしまった。だが、その後も反論をするがまったく了解する事はなく讓二はあきらめて出て行つた。その後尚樹と誠也にそのことを話した。「なんだそれ！おかしいだろ！」誠也が怒鳴る。「んなこと言つたてしよーがねーだろ？校長があほなんだし」と尚樹も言う「まあ仕方ねーだろ。でもどーする？この2時間の部活見学。」讓二がつぶやく。すると誠也が「女子はあんだろ？見に行つて見よーぜ。」体育館に行つてボーっとする三人。「バスケット。好きなんですか？」背後から声がする。後ろには三人の女子が立っていた。「あつ！いや、だつてずつと見てたもんだから。」少し恥ずかしながら真中の子が言う。「おう！好きだぜ！でもよー男子のほうかねーんだよ！ひどいとおもわねー？」と誠也が言う。すると右端の子が真中の子のこのところを指差して「うーん。あのさーこの子藤崎麗華^{ふじさき れいか}って言うんだけどさー」言い終わる前に誠也が口を出す「わかった！さては俺のファンだな！俺も結構全国で活躍したからなー」と偉そうに言うが「違うよ！」さっきの子がすぐに言う「なに！えーと。Aさん！うそはいけない！」でまた先の子が「私は

鈴木藍^{すずき あい}そしてそっちは、永野亜由美^{ながの あゆみ}だよ。だれがAさんだそれに嘘じゃないし。」「そうか！じゃこっちは」と誠也が自己紹介をしようとするが。鈴木が「知ってるからいいよ。あたしらさー試合見たの。風神对小佐久のやつ。それで話がそれちゃったけど。麗華がねー沖田君のファンなんだって」「ちよつと藍ちゃん！いきなりそんな。」「あせていた。だが鈴木は「まあいいジャン！うん麗華ねー、あのチーム得点すべてに関わった試合あれ見てからなんだ！」「とハイテンションに話しているが、譲二は「ふーん。あつそ！俺今バスケ部作ることしか考えてないから。」「と冷静にあつさり返す。だが藤崎が「だったら。私が作りますよ！」「と叫ぶ。「はあ？どうやって？」「と尚樹が言う。するといきなり永野が「あーそつか。麗華の親PTAの会長だもんねー」「え？」「今この言葉で三人に希望の光が注ぐ。

条件発生！

譲二達3人は、藤崎麗華にバスケット部を作ってくれるなら作ってくれ、とお願ひした。

そして、藤崎は彼女の親に言い、彼女の親は快く引き受けてくれた。

こんこん。「失礼します」と藤崎の親は校長室の中へと入っていく。
「おお、これはこれはPTA会長藤崎様。今日は何用でいらしゃったのですか？」

「はい、今日は男子バスケットボール部を作ってくださいるように依頼に来ました」

ごほつごほ。校長先生はまたも咳き込む。だが落ち着いて話す。

「それはなぜです？」

校長先生が聞くと藤崎の親はこう答えた。

「いや、数ある部活動の中で男子バスケットボール部を作らないのはおかしいと前々から思っていたんですが、先日娘が作って欲しい生徒さんがいるといいましてね。それがきっかけで来ました」

だが校長も反論する。

「いやですが、わが校はある事件をきっかけに男子バスケットボール部を廃部したんですよ」

「はて？ある事件と申しますと？」

校長先生の言葉に疑問をもち聞くと。

「まあ、言つのもお恥ずかしい事件があつたんですよ」

だが、ここまで来ると藤崎の親も反論の材料がなく仕方なく話を切り出した。

「ならば、何かの条件をクリアすれば、作って頂けるのですか？」

そこで校長の出して条件は。

「ならば、今年、6月の県大会の優勝チームと戦って、勝てたらいいますよ。」

と言う条件だそうだ。だが藤崎の親も。

「そんなの無理に決まってるじゃないですか！それに県大会の優勝チームが相手してくれるはずないでしょう？」

と反論はするが、校長もそれ以上無理だと言う。して口論が終わり最終的にこうなった。

へ条件。県大会が終わり、先に進めなかったベスト4の相手をし勝てたら部を作る。ただし、負けてしまったら、男子、女子、それぞれのバスケットボール部を完全に無くす。ㄥ

「そうになってしまった、もう引き返せない。すまないな、なおベスト4の相手は校長じきじきに願ってくれるそうだ」

この言葉を聞いた譲二たち、そして女子バスケットボール部は愕然とした。だが、たった1人誠也が言った。

「はっはっは。俺は全国にいったんだぜ？そして沖田も、三上も全
国レベル！県大会。しかもベスト４なんてよゆうだぜ！はっはっはは
はっははは」

ふざけているようだった。だが、本気らしい。そして尚樹も叫ぶ。

「そーだよなー！負けるはづがねー！勝てるぜ！」

だが譲二は1人違った。

「ばーか。人数たんねーだろ？せめて後二人。それに中学では時間も伸びるから交代が必要だろ。」

「って何で冷める事をいーうかね？だからもてねーんだよ。冷徹人間！」

と誠也に言われる。だがそこで女バスのキャプテンが、

「大丈夫。女バスもコート貸すし人集めも手伝うから！」

と言ってくれて少し嬉しかった。

そして俺達の挑戦は始まった

男として逃げらんねよ

「あーあ、ビラ配りなんてやってらんねーよ」

誠也が愚痴をこぼす。

「うるさいわね！まじめにやりなさいよ！あつ！お願いしマース」

誠也と永野亜由美はビラ配り。

「ふん！あんた最初は普通のおとなしい子だと思ってたのに、うるせーやつだった。」

そう、誠也が言うのと永野は少し顔を赤くして

「大きなお世話よ！あんたわかってんの？女バスの存続もかかってるの！まじめにやないと負けちゃうよ！」

「うるせーよー。俺がいればかてるつつーの！それにあんた怒んねー方がいいぜ？笑ってる方がかわいいから。」

さりげなく普通にさつらという誠也だがこんなのは日常茶飯事。まあ確かに永野は藤崎に並んでかわいい、ショートカットで、どんぐり眼、それはどこかの恋愛ゲームに出てきそうなるロリキャラである、でもさすがに永野は赤くなる。

「あ、あんたじゃないわよ！永野亜由美って名前があるんだから！」

「ふーん。わかりましたー亜由美ちゃーーん！てね」

その瞬間、誠也の顔に音速をも越える鉄拳が飛んできた。

その鉄拳は誠也の顔にあたった時に、おそろしい轟音をたてる。

「ぐうああああ」

たまらず誠也も吹っ飛ぶ。

「あたし、空手2段なんだからね！これ以上ふざけたらもっとやるからね」

そういうが、もうすでに誠也は鼻血が出ていた。

そしてこっちは尚樹と鈴木藍。

二人はずっと沈黙したままだ。

この二人は一番字が上手なのでビラを書いている。カリカリとシャープペンの芯が紙にこすれる音しかない。カリカリカリカリカリカリカリカリそのうちに尚樹が吹っ切れる。

「ああああ！カリカリカリカリって何なんだ畜生ー！」

「うるさいよ！しつかりやいなさいよ！」

叫ぶ尚樹に鈴木の喝が飛ぶ。

「っておい！あんたおかしくならぬのか？こんなに同じ物を書いて！せめて話ぐらい、しようぜ」

「やだ！あんたと話すのストレスたまりそうだし、私こついうの慣れてるし。」

そういえばかなりの達筆、たぶんいつもこの役なんだろう。

少し、哀れみを感じるな。

「ねえー沖田君？いいの？さぼったりして、あたし達って勧誘だよね？」

譲二と藤崎は二人で勧誘に行くことになっている。

「いやさぼりじゃあ、ねーし作戦会議だ。」

そう言い沖田がやってるのは石で何かやっている。

耳を澄ますと何かぶつぶつ言っている、かなりあやしい。

「ヒューあついのかいお二人さん？」

このする方を向くと柄の悪そうな三人。

「ねえ沖田君？どうしよー。あれ？武宮くん？武宮聡くんたけみや さとしだよね！？」

どうやら藤崎は真中の奴は知ってるらしい。

「知ってるのか？あいつの事」

「え？知ってるも何も同じクラスじゃない」

「ふーん。同じクラスか？武宮君！バスケットをやらないか？」

「あゝ？なめてんじゃねーよー！」

そう言い拳を振りかぶり譲二のほほへと一直線にいき直撃する弾けるような音をして当たり、譲二は倒れこむ。

「てめー、いきなり何すんだよ！ちよつとでかいからって図にのんなよ」

口をぬぐいながら譲二はそういうと拳を出す。

「ダメだよ沖田君！そんなことしたら部ができないよ！」

藤崎が止める。

「わりいーな、男として逃げらんね　よ！」
まるで

鞭のようにしならせたパンチを当てる。

「どーしよ？喧嘩になっちゃたよ。そうだ携帯で亜由美ちゃんに」

藤崎は勢いよく走るがさっきの不良の二人につかまった。

なんだ。これがバスケットボールか。簡単じゃねーか。

「へへえかわいいなあ。名前なんていうの？」

きもい二人組みにつかまった麗華。

「やめてえええ放してよー」

たまらず叫ぶも周りに人影は見当たらない。

「そう暴れんなって　へえへ」

その瞬間、すり鉢で擦るような音と共に蹴りが顔面に入る。一人倒
しまた1人と倒す

「え？誰？」

そして、まだ喧嘩を続ける譲二の背後から話し掛ける。

「おい！譲二！喧嘩はやっちゃいケネーよ？スポーツマンは！」

譲二が振り返るとそこには津堂さんがいた。

「津堂さん！」

「こらこら、津堂さんじゃない！これからは監督と呼べ！」

理解が遅かったが今度の試合の監督になったらしい。

それから津堂さんは瞬間的に相手を倒した。

「あつ！いたいた。おーい」

駆け寄ってきたのは尚樹と誠也そして他の協力してくれた人たちだ
った。

「1人見つかった！でもさーもう1人無理っばいんだよ。で、譲二
は？」

「そりゃ　無理さー譲二は喧嘩してたんだからな」

津堂さんが暴露した。

「おい！てめー俺が地獄のカリカリ音と戦っていたのにくそが！」

尚樹が叫ぶ。そして譲二はとっさに言い訳をした。

「あ！いや見つかったよ！一人！」

「あ？誰だよ！」

尚樹が言って譲二が指差したのは譲二と喧嘩していた不良。

不良が断ろうとしたが津堂さんの目線に負け引き受けた。

そうして5人は一応決まり。後の不良二人も無理やり入れた。

不良達は譲二と戦ったでかいには佐藤宗孝さとうむねたか後の二人は桜庭芳樹さくらばよしきと小林真二やしんじそして見つかった一人が三浦辰己みづらたつみこうしてスタメンが決まった。

PG 沖田譲二 SG 宇野誠也 SF 桜庭、三浦、小林の誰か PF 三上尚樹いから C 佐藤宗孝こうなった。

「ランニング！」

尚樹が叫んで指示を出す。

尚樹はみんなの推薦でキャプテンになった。だがただ1人誠也だけは最後までぶちぶち言っていた。

アップを終え、実践的な練習に入ろうとしたら津堂さんが提案する。

「んー。実践的も何もまったくわかんないだろ し、女バスと試合してちよつと見てみよう」

それが元に、試合をすることになった。

「よし！SFには三浦から入れ！」

と尚樹が言う。そして誠也が

「んでもさー俺ら三人はいいとしても、でかいのと（佐藤）ひよろひよろ（三浦）と他の雑魚二人組は（桜庭と小林）は使えねーからさーかばーしてこうぜ？」

そう、誠也が嫌味らしく言うが譲二は普通に

「ああ、当然だろ」

と答える。ピーー！！

「両チーム整列！ジャンプボール！怪我のないように！」

と言って津堂さんが審判をやる。

「よし！俺が飛ぶぜ！簡単に取ってやる」

尚樹が威勢良く言うが宗孝が払いのける。

「ふん！どきな！ちびが！俺に任せろ！」

「あ？お前素人だろが！」

と尚樹もたまらず反論するが、

「うるさい！ただあがったボールを沖田のところに打てばいいんだろ？簡単じゃねーか？」

と言いつ返しにらみつけ、尚樹が譲った。

ピー。ボールが上がる。

宗孝は長身に加えて、ジャンプもものすごく、圧倒的に俺のところへボールをはじく。

そして譲二がボールを誠也に渡すが、3Pが知られていたらしくマ
ークがいる。

そして三浦に仕方なく渡す。

「こんなひどい男子！あたしが簡単に！」

と威勢がいい女子の人がカットに行く。

が三浦は見かけどりのひどいとした感じだった。

仕方なく譲二がボールをもらいに行くが、なんと三浦は経験者でも
ムズかしいフックシュートを打った。

だが見事に決まった。

「なんだ。これがバスケットボールか？簡単じゃねーか」

「うん。僕にもそう思える」

三浦と宗孝が自身満満に言う。だが譲二は確信していた。

【すげえこれなら頂点いけるぜ！】

運命のジャンプボール

女バスとの試合はあっさりと勝利した。

譲二のアシスト、尚樹のリバウンド、誠也の3P、辰己のフック、宗孝の長身を生かしたディフェンス。

驚くことに全員経験者だった。

宗孝は不良だったくせに、辰己はがり勉だったくせに。しかし、後はそのまんま。素人だった。

「なあ、試合つて明後日なんだろう？練習たんねよ」と誠也が言つと宗孝が提案する。

「ん？だったら家にこいよ！リングあるから」

「言い普通のコートを予測して宗孝の家に行く。」

「な、何　　！！！！？？？」

宗孝の家はものすごい豪邸まるデビ　夫人の家。

そしてコートはオールコートでしかも室内だった。

「宗孝君。君の家つてすごいね」

辰己も驚きを隠せない。

「おう！俺の親父が医者だからよ！おふくろもそうだから」

全員何で不良だったんだよ！と心の中で突っ込んだ。

「んじゃ！練習するか！」

と言ったのは津堂さん。いつの間に入ってきたんだ？

「よし！尚樹はタップ千本！誠也は3P二千本！桜庭は手伝つてやれ！辰己フック千本ずつ小林は手伝つてやれ！宗孝と譲二は1ON1だ！」

と津堂さんが指示。

「なにー千本？なんだこのメニューは」

と尚樹が言つが津堂さんがにらんだ。

みんな津堂さんの強さは知っているので文句は言わずやりだした。そして明後日を迎えた。

「今日の相手は？津堂さん！」

と尚樹が尋ねて返ってきたのは

「ん？青陵学園。」

そこはかなりの名門校。

「お？お前らが相手か！」

話し掛けてきたのは今日の相手らしい。

「！サッキー」

「知ってのか？宇野！」

「てめー！三上！覚えてね　のかよ！俺は小佐久の4番！久原さきだ（くばら）」

「あー、いたねー！」

「てめーなめてんのか？今日ばこぼこにしてやるからな！」

「あ？何のことだ？」

「はっははー今日は俺達青陵の1年が相手だからだ！」

と叫んでどこかに行った。

「くそーなめられてんなー」

そして試合2分前。

「両校整列！」

と審判の合図に整列する。

「頑張つてねー！」

女バスが応援にきてる。

「おい！レギュラーもいるぜ！」

「よし！譲二！レギュラー引きずり出してやロージャン！」

そして、バスケットができるかどうかの運命のジャンプボール。

レギュラー現る

ボールが上がる。

宗孝とその相手はかなり身長差がある。

簡単に宗孝はタップをし、譲二のところへボールが行く。

「ナイス宗孝！ーいくぞ尚樹！」

と譲二が勢いよくドリブルをするが相手のディフェンスに戸惑った。

「ボックスワンか。」

「？おい津堂さんよ！ボックスワンってなんだ？」

「ん？ああ、小林達は素人だったな、3Pの打てる宇野にマンツーマンについて、後はゾーンを張るんだ。そうするとインサイド、つまり中でのシュートが難しくなる」

「なにそれ？酷くない？てゆーかせこい！」

「いや、久原うちのチームをしつかり知ってるからな。見事な戦術だよ」

宇野にしつこくマークがつく。

「だあーくそー！ーどけえ」

「誰がどくかあー」

何かを言い合っている。（馬鹿だ）

仕方なく譲二が切り込む。

（くそ！ぱすがでねえ）

その瞬間に、宇野が宗孝のスクリーンでフリーになった。

「ボールよこせえー！」

ボールが宇野に渡る。

そして、宇野が放ったシュートはきれいな放物線を描きリングにノータッチではいる。

「ははははっはー！サッキー！貴様じゃ俺に勝てねー！」

「サッキーと呼ぶな！それにお前のマークは俺じゃねー」

相手のセンター勝負に行く。が

まるで雷のように上から宗孝の手が落ちて来る。

雷のような手はボールをはじき、はじかれたボールを宇野がキャッチする。

「おらよ・譲二！」

譲二にパスが渡るが、ディフェンスがもう来ている。

「譲二君！！」

三浦がパスをもらいに行く。

「よし！いれるぞ！」

三浦が相手に背を向けながらボールもらつ。

「叩き落す！」

相手のCが威勢良くジャンプするが、まるで芸術のようなフックでシュートを決める。

だがその後も風ヶ丘に流れが行く。

「宗孝！パワープレーだー！」

「おおおおおしゃあああ！！」

雷の次はダンプだった。すごい力で相手を吹っ飛ばす。

「らああ」

簡単にシュートを決める。

そして宗孝と尚樹のリバウンドはすごかった。

誰も寄せ付けないリバウンドだった。

「おし！尚樹次はお前だ！」

譲二から尚樹のパスがこの試合初めてと行く。

「まけるかー！！」

「負けるぜ？久原！」

だが、一瞬で尚樹がシュートを決める。そのときから相手のベンチがゆれる。

「おい！久原までやられたぞ。うちのスタメンなのに。後は違うけど」

ビー！！第1クォーターが終わる。

「おいおい！楽勝じゃねーか」

「いや、尚樹今から変わるぜ。あちらさんのレギュラーがアップをはじめた」

余裕の顔が一気にさめる。

「津堂さんどうすんだ？」

「どうすんだって全力で行くだけだろ？23-4で勝ってるんだから。でも久原だけはスタメンだからな。問題は後の連中。譲二！お前のマークの川田峻奴はPGの県選抜に選ばれている。後宗孝、お前のマークのデリック。ハーフだ、身長はお前と同じぐらいだけど、あいつも県選抜。後も名は知れてないが強敵だからな。」

だが三浦は自分のマークマンには勝てないと思っていた。

（古藤卓司三浦のバスケットをやった時の知り合い）

第2クォーターが始まった。

ロールの、風？

青陵ボール。

（古藤君。僕は君の事をずっとライバル視していた。でも勝てなかった。フックシュートも何も通じなかった。僕为天敵そして君は先輩となり卒業していった。）

「あれ？辰己？お前バスケットやってたんだ？あの時ボツコボコにしてやったのに」

三浦の顔が赤くなる。

「三浦！お前のマークマンだ！」

三浦も負け時のディフェンスをする。

「えーーーーー？！」

小林と桜庭が驚き声をあげる。

それもそのはず、三浦しか出来ないと思っていたフックシュートを古藤がやったからだ。

「っはは、辰己！これが本場なんだよ！」

「気にすんな！一本とろう！」

三浦からパスを受け取った譲二の前にいきなり川田峻が現れる。

「君をマークすればアシストが消えるからね。」

「ふん！消えねーよお前のマークじゃ！」

だが、なかなか進めない。

「だーーーーー！！へたっぴい！パスをだせえ！」

くるしまぎれにパスを宇野に出す。

「逃げるの？」

「うるせー！」

（くそ！こんなディフェンス。初めてだ！）

「だーーーーくそお！他の奴に変わってもこんなべったりかよ！」
宇野も苦しいディフェンスに圧倒される。

「宗ちゃんお願い！」

宗孝にパスが渡る。

「りやあああああああ」

またもダンプのようなあたりでぶつかる。

が壁に衝突したかのようにびくともしない。

だがひるまずターンをしてシュートに行く。

宗孝が雷ならデリックは避雷針の斧のように振り落とし轟音がする。

（完璧なブロックだ。俺がやられた？）

「吉武！」

デリックの高速なパスを受け取ったのは宇野のマーク。

よしだけ こうむ
吉武公務彼がこの強豪のスタメンの存在理由それは、3Pだった。

「ナイツシュ・コーラーむ！」

（だめだ！流れがあっちにいつてる。俺がどうにかしないと、こいつを、川田峻を倒さないと。）

「プイイイフアール！」

「宗孝！フアールはするな！」

「すまねえ」

（はあはあ、やべえ）

（！！！！5点差？いつの間に？）

譲二があせりドリブルで突っ込む。

だが川田にカットをされる。

（3点、差）

「やつぱ、1年だけじゃダメなのかな？」

桜庭がつい愚痴をこぼす。

「あきらめるな！」

そういつた津堂さんも悲しみの表情を浮かべる。

（何あきらめてんだよ！校長が見てんだぜ？バスケが出来るかどうかんだぜ？俺はあきらめねえ）

尚樹は自慢の負けん気魂を魅していた。

「譲二！てめー川田とかいうー奴にやられっぱなしじゃねーか！俺との1ON1のときの実力見してみろ！俺は久原なんかに負けねー」

ぜ？あきらめてんのか？それとも寝てんのか！ぼけえ」

（は？誰があきらめたなんていったよ、まだ3点差だぜ？待ってるよそこで！）

譲二が最後の負けん気でドリブルを開始する。

「抜かせないよ！譲二君」

「くそお、なめんなあー……！！！」

右に抜こうとする。

そして回転しながら相手に背を向けて抜く。

（抜かれた！ロールターンか！しかしなんだこのロールターンは！まるで風を起こしてる見てえーだ）

「おおしゃあー！待ってるよな？尚樹！」

「ロールの、風？」

津堂さんがつぶやいた。

まぐれだとしても

体育館のベンチ。

椅子に座ってる小林が、さっき津堂さんのつぶやきの事で質問した。

「ロールの風？なんだそりゃ？」

津堂さんは振り返り、まるで子供のようにワクワクした顔つきで言った。

「ロールの風って言うのはな、まあ、俺達が呼んでいた名称なんだが、俺がJBLでプレーしていた時に、同じロールターンを使う奴がいるんだ！中学生でそれを使うなんて、まぐれだとしてもすごい！」

そう言う津堂さんに今度は桜庭が眉間にしわを寄せ質問する。

「まぐれだとしても？まぐれなのにすごいのか？てーか、ジャーパーアルって何？」

「JBLだ！正確にはバスケットボール日本リーグ機構の事なんだが、今の日本のトップのバスケット選手がいるとこだぞ」

納得した顔の二人。

コートの中では、

川田峻を抜いた譲二がドリブルで中央に走る。

「おおおおおつつつしい！譲二！来い！」

尚樹が4分の1の所で高高と手を上げボールよこせとサインを送る。中央のあたりから、譲二が胸のあたりで力をため、一気に腕を伸ばし、一直線の尚樹にボールが当たり、尚樹が取った瞬間。体育館にボールと手が当たった音が激しくなった。

「喰らえ久原あー！」

尚樹が勢いよく突っ込む振りをして、横にボールを流す。するとマジックのように走りこんできた譲二のところにボールが行く。

あせって譲二にマークに行く久原。

その瞬間尚樹もターンをしてゴールへ走る。

だが譲二はキャッチする前にはじいて尚樹にボールが行くが、相手のデリックが叩き落そうとする。

宗孝は疲れと、デリックに負けたショックで動かない。

「チビがあ！俺の高さに勝てるか？！」

「うつせー黙ってる！」

だがボールをキャッチに行く尚樹は確かにデリックに負けていた。

「叩き落されちゃうよー！」

観客席にいた藤崎がつい大声を出す。

（叩き落される？はっ！ばかな、こいつのあきらめないジャンプは、絶対負けない！さあ！見せろ！俺を越えて勝ったあの力を！）

「ばかな！こんなに高いなんてありえない！何m飛んでるんだ！？」
デリックも驚きを隠せなく叫ぶ。

空中で尚樹の手はデリックの手と頭を越えリングに向かい、手からボールが離れる。

デリックを越えたボールはふわっとリングに落ちていった。

「おおおお！！入った！すげーぞ尚樹！」

桜庭が興奮して叫ぶ。いや、会場全体がわめく。

「キャー――！！すごいよ！すごい！」

女バスも叫ぶ。

「すげー１年だってよ全員！」

「ああ！まるでマイケル・ジョーダンとマジック・ジョンソンだったぜー！」

観客も叫ぶ。

「津堂さん！あいつらが言ってたのだけだれ？」B.L.って言うヤツの選手？」

思わず身を乗り出し質問する小林。

「いや、NBAだ。ナショナルバスケットアソシエーションの略で、アメリカのリーグだ。その選手で、マジック・ジョンソンは華麗なノールックパスで観客をわけせ、マイケル・ジョーダンは神様と

言われ、そのジャンプ力は、フリースローラインからダンクを決めたって言う。」

「へー、すごえんだな。」

ビー――――！！！！

第2クォーター終了。

4つ目のファール

第2クォーターが終わりベンチに戻る5人。帰ってきた5人に津堂さんが声をかける。

「よおし！ナイスプレーだ！尚樹、譲二！」

尚樹は鼻を親指でこすりながら言う。

「おいおい！デリックもたいした事ねーな！簡単だぜ！」

「ふん！俺のパスが良かったんだよ」

二人が言い合いしてる様子を見て津堂さんが発言する。

「お前らは譲り合うつて事を知らないのか？」

それを聞いてた宇野もこう言う。

「くそおー！俺も次から活躍してやる！」

それを聞いてた三浦がとどめの発言。

「すごいね。プロになれるんじゃない？僕も負けてられないや！」

「は？プロになれる？NBAか？プロは日本にねーぞ！」

三浦の発言に宇野が言うが、津堂さんがしつかりと言う。

「出来たんだよ。今年からプロがね。」

みんな驚いて盛り上がったが、宗孝は何かを考えていた。

（どうするんだ。俺！譲二は川田に勝った。尚樹は久原をあっさり、デリックにも勝った。俺ははつきりしていない。三浦や、宇野は勝てそうなのに、ちきしょう！ちきしょう！）

宗孝は拳をぎゅっと握りくやしがつた。

心配した桜庭が昔のなじみで横に座り話し掛ける。

「宗さん！気にしないでバンバン行きましようって！」

「うるせ！大きなお世話だ！素人のお前に毎日頑張ってた俺の何がわかる！！」

宗孝は毎日不良としながらもバスケットはやってた。

ビー……！！第3クォーターが開始。

第3クォーターが開始で両チーム得点の取り合いになった。

譲二がアシストをすれば川田もアシストをする。

久原も点に絡む。

尚樹も絡む。

三浦と古藤がフックの打ち合いをすれば、宇野と吉武の3Pの打ち合いをする。

一気に65対62と点数が跳ね上がるが宗孝はなおもデリックにやられていた。

（ちきしょう！全員波に乗ってる俺だけが！俺だけが！）

「宗孝行つたぞー！！」

川田からのパスがデリックに行く。

慌てて背後に宗孝がつく。

だがデリックが宗孝より激しいあたりをする。

宗孝押し返そうとすると、デリックはターンをしてあっさり宗孝をかわす。

（やべー畜生！）

フリーになったデリックはシュートの構えからシュートに行く。

「うおおおおっおおお」

くわつと目を開き宗孝がブロックに行くが、デリックの上に覆い被さった。

「ピイイーファール！！プッシング！（敵を押しした事をあらわす用語）2スロー！」

そのとき宗孝は目を疑った。

ファールカウントを表す札には、4と表示されていた。

（4つ目？あと1つで退場！）

「何やってんだよ宗孝！」

譲二が叫ぶが宗孝は意気消沈したまま俯く。

デリックはこの2スローを2本とも決め1点差になった。

「やばいな。4つめか、とても桜庭や小林じゃな」

津堂さんも眉間にしわを寄せた。

宗孝復活！結城昌兵来る

ビィー

「タイムアウト！風ヶ丘！」

津堂さんが宗孝のファールでアDBAイスをしてやろうと思ひタイムアウトを取る。

「おい！宗孝！てめー何してんだよ！」

尚樹が怒鳴る。

「わるい、わりー、」

宗孝は反論しようとしぬい。

「宗孝。おまえがいなくなると困るんだ。持ち応えてくれ！」
「うっす」

宗孝も返事はしているが、頭には入っていなかった。

「……僕たちがふんばるしかないよね。」

「だけど、デリック押さえるには宗孝じゃねーと」

三浦も譲二も冷静に読んでいるが、デリックの脅威はどうしようもないらしい。

ビィー――

無情にも始まりのブザーは鳴る。

宗孝がゆっくりと椅子から立ち上がりコートに向かおうとする。

「元気が無いなー宗ちゃん！」

そう言った宇野は後ろにいて人差し指を立て後は握り、しゃがんで
いる。

「元氣ハツラツ！元氣注入——！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

元氣良く叫んだ宇野はそのまま人差し指を宗孝の肛門へ突き刺す。
ズンと勢い良くはいったとき宗孝の悲鳴が聞こえる。

「ぐぎゃ　おお　おお　おお　おお　ー！！　てめえ　ー　ざけてんじゃ　ね　ー」

振り返りながら宗孝の恐怖の鉄拳が宇野へゴリツとあたる。

「見ていた女バスなどの観客から笑い声が聞こえる。

「へ？何をしたんだ？！」

「お、俺は見た！やつはカンチョーをした！！！！！！！」

そのままゲームが再開した。

始まって譲二に尚樹からボールが渡りドリブルを開始。

「ヘイ！ジヨおー！ー！パス」

なぜかさつきからハイテンションの宇野が叫び、つい宇野にパスを
してしまった。

パスを取るやいなや宇野は宗孝にパスをする。

「がんばれ宗ちゃん！」

その言葉にしゃくに触ったのか、宗孝は叫びデリックに挑む。

「うるせえー！！！！！！！！！！黙っとけ！」

「おおお」

勢い良くデリックにあたる。

よほど威力があつたのかデリックが崩れる。

そのままシュートを決めた。

「ベルリンの壁崩壊っすね！」

桜庭が叫び、それにぐつと親指をつきたて宗孝が答える。

宗孝が復活した。

ビーーーーー！

ここで第3クォーターが終了した。

「よし！ナイスだ宗孝！3点差で第4クォーターには入れるぞ！」

「うん！俺の元気注入が効いたな！」

宇野の言葉に宗孝が背中をけって言う。

「んなわけねーだろ！ばーか」

みんなに笑いが出る。

だがこのままでデリックや川田が黙らない。

「くそ！今度は負けねーぞ！」

「落ち着けデリック！3点差だ！」

「落ち着いてられるかよ！」

デリックが激しくなっている。

「落ち着けよ。」

後ろに見知らぬ人が立つ。

「昌兵！直ってたのか！」

川田が親しげに近寄る。

「久原がんばってるか？後は任せろ！」

「頼むぜ！」

彼の名前は結城昌兵怪我ゆうきしょうへいいなかったが、代わりに久原が出ていた。

「さあーいこうか。」

「7番？久原じゃねーぞ」

久原で十分

「おいおい！なんで久原じゃねーんだ？おまえ誰だ？」

尚樹が結城に尋ねる。

「……………久しぶりの試合だね！懐かしー。……………止めてみるよ俺を。
三上尚樹！」

「えらそーに」

川田がボールを持つ。

しつかりと川田を譲二がマークする。

「久原は1年！2年よりは上手いけど、それでも足手まとい。けど、
昌兵は上手いぜ！」

川田そう言々とパスを結城に送る。

「いっくよー」

（いちいちうるせーやろーだな）

だが尚樹の目に入ったのは、結城がボールを持ちしゃべった瞬間フツと消えたことだけだった。

一瞬にしてゴールを奪っていた。

「遅いね！君。久原で十分なわけだ！」

カーッと赤くなり尚樹は怒りに燃える。

「おい！どうしたんだよ。おまえがあっさりと抜かれるなんて。」

「……………消えたんだよやつが。」

「あ？んなわけねーだろ…っておい！」

譲二に一言といった後すでに尚樹はコート奥に走っていた。

「くそが！なにやってんだ。」

譲二が怒りを震わせるが三浦が止める。

「仕方ないよ。彼は早かった。カバーもできなかったし、」

三浦は何か言いかけたが途中で止め、譲二にパスを渡し走り出す。

「話してるなよ！」

川田の声にはっとする譲二。

「もうさっきのロールドターンはやられない！」

譲二はロールドターンのまぐれのやつ以外川田を抜けていない。
だが斜めに宇野が立っている。

スクリーンプレーだ！（相手のコースに立ち邪魔をしぬくテクニク）

「スクリーンか！」

抜いた瞬間そのままシュートに行こうとしたが、デリックなどに阻まれる。

「っ 尚樹！」

とつさにシュートからパスに切り替えた。

「ナイパス！」

（なっ 久原ならもう抜けていたのに！？）

目の前には結城が立っていた。

「君とあの沖田君との連携は読んでるよ」

尚樹は斜め後ろにとび、結城をかわしシュートを放った。

「！フェイダウンウェイ？逃げるなよ！尚樹」

譲二はとつさに叫んだ。

シュートは惜しくも外れ、リバウンドは競ったもののデリックが押さえ、宗孝が悔しがっている。

（なんで逃げた！俺が、かわすよりあたるのが俺だろう？くそ！悔しい！あいつの気迫にびびって逃げちまったよ！くそやろう！）

「尚樹！戻れ！デIFェンスだ！」

譲二の叫び声で我に返りデIFェンスに戻る尚樹。

「いいテクニクだね、後ろに飛ぶなんて」

クスツと笑う結城。

むきになりかけた瞬間尚樹は結城のマークをはずしてしまった。

「しまった。宇野！スクリーンだ！」

ここで吉武のマークが外れた。

かかさず川田がパスを送る。

シュパツときれいな音がした。

「わりー」

（しまった！また結城にやられた。これで4点差か。）

「くそ！今度わやられねー！」

勢い良く尚樹は叫ぶが結城は膝に手をついていた。

（昌兵！1年もやってなかったんだ。無理するな。）

その後結城はなんも攻撃をしてこなく、4点差のまま残り1分。

だがディフェンスは完璧にこなし、まったく攻められない尚樹であった。

ロールの風再び

「おい！結城昌兵とか言ったな！なんで攻めてこねーんだ！？なめてんのか！？」

川田がボールを運ぶドリブルの音とわずかな選手の声しか聞こえなくなったコートの中。

残り1分で、4点差で星陵学園リード。

緊張感からか、観客からの声は消えていた。

（攻めてこない？ちげーよ。攻められねーんだよお！スタミナが持つか？後1分。やってみるか？全力で。）

ドリブルで進む川田。

止めようとする譲二。

（どーする？昌兵を使いたい。でもあいつは、…吉武はマークがきつく3Pが打てねーし、無駄に打つ場面じゃない。だとしたら古藤か？ただあの三浦とかゆーやつが読み始めている。ここは、デリ……）

計算している川田の隙をつき、ボールを奪い取った譲二。

「やべえー！！」

猛スピードのドリブルでゴールにかけ進む譲二を必死に追いかける川田。

（無理か？追いつくのは！！）

だが川田が追いついた。

シュートに行く譲二。

それを止めようとしてジャンプをする川田。

その瞬間尚樹と結城が叫ぶ。

「いけえー！譲二！！！！」

「誘いだ！乗るなあー！！」

（シュートブロックだ！打て！）

川田がブロックに行くが打たない譲二。

（まだ打たないのか？）

（川田、体が流れて止められねーだろ？）

シュートを放つ譲二。

そして川田は譲二に乗りかかった。

シュートは決まる。

「ピイイーーーー！！！！！！ファールプッシング！カウントワンスローー！！」

がっくりと膝に手をつく川田。

女バスのほうかも歓声が上がる。

そしてフリースローを決めその差1点に詰まる。

だがこのシュートで湧き上がる5人の譲二、尚樹、誠也、辰巳、宗孝はディフェンスそして、コートの3Pの位置で待機する吉武公務の存在に気がつかなかった。

ボールをすぐドリックを持ち、思いっきり投げる。

「吉武えええええ！！！！！！」

はじけるような轟音がしたすぐには、吉武がシュートを構えている。しまった！と、全員が思い汗がわつとふきだした。

そしてノーマークの吉武は綺麗で華麗で繊細な3Pシュートを放つて、そのボールは綺麗な放物線を描いていた。

残り43秒のときだった。

そのシュートで5人は鳥肌が立ち、湧き出た汗が一瞬にして引いていた。

「4点差になっちゃった。いや、戻されちゃった。」

「いや、あきらめんのは速い！いくぞ！」

宇野ががっくりとするがすぐに譲二が盛り上げる。

辰巳がボールを出す。

譲二が攻めこむ。

「誠也！」

「宗ちゃん！」

「尚樹！」

「辰巳！」

パッパッパッといままでにない、ボール回しだった。

「くそ！冷静じゃねーか！」

そして最後に譲二がドリブルでカットインする。

（攻めるには出きるかわかんねーけど、ロールターンしかねえ！）
にわかロールターンを仕掛ける譲二。

そして奇跡が起き、譲二は風を起こせた。

ロールターンの風が包み込み、ジャンプして風を抜けたら、そこには。

空にリングとボールを持っている俺しかなかった。

決着！！

「おおおっし！！ナイツシュー譲二！！」

静かな体育館に歓声が出始めた。

譲二が起こした風は誰にも止められることなくリングに吸い込まれていた。

くやしなながらも攻め出す星陵。

そして時間が無いのでオールコートでディフェンスをする風ヶ丘の5人。

川田がドリブルで抜こうとするのを防ごうとする譲二。

（さっき俺は追いついた！スピードでは上！抜ききってやる！）

だが川田は一瞬で廻りこまれた。

そしていきなり前に廻りこまれ、スピードでは上と思っていたので驚き一瞬とまどった隙を突きカットした。

そのままゴールに向かう譲二。

「悪い！デリック！昌兵！止めてくれ！」

ゴールに向かいジャンプをする譲二。

その前に立ちはだかるデリックと昌兵。

だが譲二はボールを後ろに投げた。

残り6秒2点差星陵リード。

「逆転には3P！」

譲二が言った後、後ろにボール投げ、取る誠也。

「やつは最後は俺でしょう？」

と言いシュートを放った誠也。

1番いい弧のシュート。

「もう、外すのはごめんだ！あのときみたいに！」

シュパッと、聞こえた音。

その直後。

「ビィィィィィィィィィィィィィィィィ！！！」

試合終了を告げる音が会場全体に鳴り響く。

「勝った。勝ったんだな！やっぱ最後は俺！」

ワアアアと歓声が起きる。

（完敗だな。沖田譲二。次は好きにさせない。）

「このとつりで風ヶ丘！礼！」

「ありがとうございます！」

ベンチに戻る5人に拍手を送る津堂と女バス。

「よっしゃあーやったぜえー勝ったあー！！」

叫ぶ誠也。

「よくやったな、おまえら！」

盛り上がるベンチに近づく川田。

「おい沖田譲二！最後なんでお前はあんなに速く走れたんだ？速攻の時は遅かった。」

「あの速攻さあーわざと追いつかしてファウルもらったんだよね。」

「な！」

ちつと舌打ちをして去っていった川田。

「イヤーいい練習試合だったね！」

お気楽に言う誠也。

「良かったなこれで部にしてもらえんぞ！」

津堂が言う。

「そう言えばそういう練習試合だったんだな、」

宗孝の発言にみんながきれる。

そして後ろには校長が立っていた。

その校長を見た尚樹が近づいていく。

「校長！見てたか！勝ったぜエー点差だけど。」

そう言う尚樹にいやな顔をするかと思つた校長は真逆に笑顔で言つた。

「ああ！見ていましたとも！あの強豪を倒すなんてね。驚きましたよ！正式に部を作る事を約束すると同時に部費も出しましょう！」
少しきよんとする皆の中1人冷静に譲二が尋ねた。

「なあ、なんで部を作らなかつたんだ？しかもバスケ部だけ。」
「そう言う譲二に津堂が」

「そうですね。確かにバスケ部は弱かったけど、暴力事件を起こしたわけでもないのに。」

「じゃあ。あなた達の先輩がやったことで、とんでもなくPTA会長やその他の方々が激怒してしまい、部をなくすまでおいやられてしまったわけを話しましょうか？」

「そう言う校長に全員うんとうなずく。」

「じつはですね。あれは、ちょうど8年前の時でしたね。」

「津堂さんも現役でここにはいなかった時だ。」

「当時の先輩はとても強かったですよ……………」

「ナイツシューーーー!!」

7番のユニフォームを着た人と、4番のユニフォームを着た人のナイスプレーに興奮し喚き叫ぶ監督兼顧問の校長。

「校長が顧問だつたんだ」

「ええ。そして大会が始まりました。順調に勝ち進んだあの人たちはとうとう全国行きの切符をかける試合に臨みました。」

（ん？遅いなあーヤツら）

「最初は少し遅いな。としか思ってたんですが、結局来ませんでした。」

「なんで？」

「宇野が聞くが校長も知らなかったらしい。」

「ええ、その後学校で何度聞いても答えてくれず、何しろ全国行きがかかっていたので結局部を停止するしかありませんでした。」

「背後から声がした。」

「そのことなら、俺が話してみましよう。」

「後ろに立っていたのは180cmはある人だった。」

「……陵駕？」

りょうが。とつぶやく津堂。

昔の天才の先輩達。

「陵駕。お前なんでこんなところに？」

津堂が聞くと陵駕は、

「そりゃあこの中学が母校だからっすよ！」

そう言っていると校長が

「陵駕？まさか！あの津浪つなみりょうが陵駕か！？」

「へ？だれっすかあんた？俺はここの校長に用があつて。

あんたがそうか？」

そう言っていると校長はこくんとうなづく。

「うおおおおー先生！！久しぶりいー」

「え？JBLの陵駕さん？風ヶ丘出身だったんですね！」

そう叫ぶ辰巳。そして校長が、

「尚樹君！この人が当時のキャプテンで君の着ている4番を着た人！同じポジションだしね。」

「そうなんだ。」

小声だったので誰が言ったのかわからなかったが多分尚樹だろう。

「ところでその来なかった原因ってなんなの？」

藤崎がつい聞いてしまった。

「それは当時譲二君と同じ7番を着ていた……」

「俺の事かい？」

背後から声がしたそこには身長が170ぐらいの人がいた。

「ジョウジ！」

陵駕が叫んだ。

ピクツと反応した譲二。

「まさか、譲治までいるなんて。」

「偶然だねえー俺と同じ名前のやつが同じ7番のユニフォームを着て同じプレースタイルなんてね」

その男はすたすたと譲二にちかずくと、デコピンをした。

「ま、俺の苗字は瀬良^{せり}だし、漢字も違うけどね。それに…俺の実力には程遠い！」

譲二が力チンとして言い返そうとしたがその時には校長に話しかけた。

「おつす。樽林（くればやし。校長の苗字）！元気？」

校長にも気軽だった。

「おい！譲治！誰のせいだと思ってんだあの事件は！」

そう言う陵駕。

「はいはい！どうせ全部俺のせいですよ！俺の勝手な意地の！」

「どういうことです？」

「あ、すみません校長！あの時は譲治の意地で言わなかったんですが、…今ならいいよな？譲治」

「ああ、」

「あの時は譲治が勝負のために抜け出したんです。」

「なんだ考えていることはいつしょか？」

陵駕の話はまた中断した。

すると後ろには3人の人が。

「おお、お前達まで。」

その3人は160程度の低身長の人と2mはあるビッグマンそしてすらつとした眼鏡をかけているのが譲治と同じ位の人だった。

160程度のは当時SGの3Pシューターの木場^{こば}氏^{しけんが}懸河^{けんが}今は社会人でバスケットを続けている。

2mは当時Cのパワープレイヤー^{かわらやみよし}瓦屋^{かわらやみよし}美代治^{みよじ}この人も社会人に進んだ。

眼鏡をかけているのが当時SFのフックシュート^{おおがみじゅん}使いの大神^{おおがみじゅん}純^{じゅん}今は学者。

譲治はJBLらしい。

「じゃあ話そうか歴史を！」

反発、敗戦、自信、結果

「俺達はなあ、ミニバスからずっと一緒に、ミニバスでは全国に行っただよおーでもなあー中学でナあー」

瓦屋先輩が間延びした言い方で言う。

「うおおおーまた決めたあーあの7番！上手いなあー」

中学の初めての大会。

監督の榎林は実力順でレギュラーを決めるために、5人はすぐにスタメンになってしまった。

その当時の先輩は下手ではあったがそれなりにやっていたためいらつき、そして反発した。

ガン！と譲治のむなぐらを掴みロッカーにたたきつける。

「てめーらがでかい顔をしてくれたおかげでめっちゃめっちゃででけよ邪魔なんだよ！」

「ハン！負け惜しみか？見苦しいぜ？下手くその方が出ていった方がいいんじゃないの？邪魔だし、端っこにでもいてくれよ。あんた俺が来る前は俺のポジションだったらしいね。実力重視！この言葉が榎林の考えだ！解る？」

「何い！」

先輩に反発する譲治をなだめようと陵駕が出てくる。

「すみません！おい！譲治も生意気なこと言っただねーで謝れよ！」

「ほおおー。言いこと言うじゃねーか陵駕君！なあー」

謝る陵駕に先輩がいきなり頭をつかみ膝蹴りをした。

「くあー！ぐう」

悲鳴を上げる陵駕。

「あーあ。やッちゃッタ！陵駕は俺より短気で危険なんでぜえー？その前の俺が殴るけどね！」

一歩前に出る譲治を片手で制し止める。

「やめろ譲治！」

「あ？なんでだよ！」

「俺がやるからだ！」

そういうとすさまじいスピードの鋭いパンチが先輩に入る。

「なにすんだよ！やっちまおうぜ！」

「相手になりますぜ先輩！」

そういうと5人の先輩たちは突っ込んだ。

「このでかぶつがあー！！！！」

などと罵声が始まるが、何しろその時すでに180はある長身瓦屋と、合気道を習う木場氏懸河と大神。

そして危ないと言われるコンビの瀬良と津浪には相手ではなかった。10分後には全員横たわっていた。

その結果、10日間の活動停止、そして先輩は居づらくなり全員退部。

5人の先輩しか入らなかったので1年5人の部活になった。

そして県大会まで勝ち進むと言う快進撃を見せたが、結果はそこでストップ。

小学で全国に行ってもそこまでは通用しなかった。

そして先輩たちは小学校から反省会をしている場所のコートに立ち寄った。

「くそ！なんで勝てなかった？ちくしゅう！」

空気が暗くなる中一人叫ぶ譲治。

「やっぱ。なめてたんかな？バスケット」

そう言う瓦屋。

そして無言になる。

「こうなったらよ！頂点極めようぜ！そうじゃなきゃ、そうじゃなきゃよ！気がすまねーんだよ」

こうして5人は、1つ1つのプレーに誰にも負けない自信と強さを身に付けていった。
そして2年の時全国に行った。

決闘！

瀬良達のミニバスからの5人は中学で全国に行ったが、試練は3年の時だった。

全国に行きとても注目を浴びる瀬良達。

世間では『2年で既に全国に行ってるんだ。今年も楽勝だろう。』
と言われ期待が積もっていた。

だが全国を阻む1つの中学が前に立った。

それは、青陵。

そう、川田達の先輩で、伝統的な強いチームの黄金時代に入っただけの年。

今までで一番強い時の青陵だった。

全国に行けるのは1チームのみ、トーナメント式で行われ、ブロックは別々。

お互い順々に勝ち進み決勝で当たることになった。

3年になった先輩の5人を中心に団結力のあるチームになった風が丘は、突然内乱のようなものが起きた。

そのきっかけは、譲治から。

「やめる！？中学をか！？」

「ちがう。転校だ」

「同じようなもんだろが！！譲治！！」

体育館で喚き散す津浪に冷たくことえる瀬良。

「なんでだよー！！決勝戦にきたんだぜ！？PGのお前がいなくちゃ勝負なんねーだろーが！お前のプレイスタイルから中心のチームだったろ？忘れたか？」

「大丈夫さ、俺がいなくても2年のカズがいる。」

「じゃあなんで転校なんだ！」

黙り込む瀬良。

その譲治を全員がにらみつける。

「この学校じゃよー焰咲（はなざき）にいけねーんだ。全国トップの高校の監督に誘われたんだ。でもここじゃ行けないから、こっちの中学に來いって。」

「何言っただよ！俺ら高校も同じトコ、行っで頂点に目指すんだろ！」

「ダメだ、ゝ、あそこじゃねーとダメなんだ！」
ばきいー！と音がした。

津浪は絶えられなくなり瀬良を殴った。

「このやろっ！！」

今度は瀬良が津浪の顔面に強烈な一撃を送る。

これが最初で最後の”コンビ”のケンカであった。

「勝負だ！1ON1で、明日いつものコートで待ってる。俺が勝ったら転校する！お前が、いや。お前ら4人誰か一人でも勝てたら、俺は決勝戦へとそのまま行くー！」

「のるぜその勝負！」

そして瀬良は帰っていった。

そして翌日。

瀬良はコートの真中でボールを持ち仁王立ちしていた。
そこに4人がやってきた。

「行くぞ瀬良！どうしても来てもらう。」

「明日どうする？」

瓦屋が尋ねる。

瀬良が帰った後4人は話し合っていた。

「どうするって、やるしかねえだろ？」

今度は木場氏。すると大神が、

「でも戦略とかはどうするんだ？」

「いや、、、真つ向勝負だ!」

津浪は力強く言った。

「いいか、順番は懸河、美代治、純。そして俺だ。なるべく粘ってくれ疲れたところを俺が倒す!悔しいが奴に1ON1で勝てるのはそれだけだ!」

(奴? 陵駕が譲治の事を譲治と言わなかった。それだけまじなのか。)

「いいだろう、この4人で1番1ON1が強いのはお前だからな。」
そういう懸河。

「よし俺から行くぜ!」

勢いよく懸河がでる。

「いくぞ。先攻はもらうからな!」

「ああ。」

そして5人の決闘が始まった。

本当の強さ

「なあ喧嘩した勢いかもしれないけど、譲治はなんでこんな無謀な勝負を仕掛けてきたんだ？」

懸河対譲治の1ON1が始まった朝、途中で美代治が言い出す。

「確かに、あいつの1ON1はずば抜けて上手いけど、俺達4人に連続で勝てると思わないだろ？それに、あいつはウチのEESPG。冷静さがかけることはないし、しっかりした状況判断ができる。喧嘩の勢いの勝負だとは思えない。」

冷静に言い出す津浪にまた大神が

「は？なら俺達に絶対勝てる自信があるってのか？」
そう言う大神。

「ああ、絶対勝てる自信があるそうだよ」

津浪がそう言う懸河の勝負がついた。

「10-0で懸河の負け……」

「はあ！！はあ！お、俺が3Pを打たしてもらえなかった！！ありえねエ」

ものすごい強さだった。

そして美代治も10-3、ゴール下でのシュートを打たしてもらえず長身を生かせず、無理に打った3Pシュートが偶然入っただけであつた。

大神はフックシュートを完全に止められ手足も出ず10-0だった。

「いくらなんでもこれほどまで実力差があつたなんて」

4人は全員そう思った。

最後の一人、津浪陵駕さえも瀬良譲治に勝てるか自信が無くなつていた。

だが全ての希望は最後の津浪に託された。

「最後だな、陵駕。来い！」

津浪の頭の中では、記憶と思考色々な物が飛び交っていた。

（いつからだ？これほど実力差がついたのは。俺達はミニバスからずっと一緒に同じ期間をやっていた。じゃあ何故こんなにもあいつが強く大きく見えるんだ？くそ！弱気になるな！大丈夫だ勝てる！やれ！動け！すくんでいるのか？もう負けだと思っっているのか？違う！認めるな！目の前の現実を！うそだ！うそだ！）

「どうした？こないのか？もう6 - 0だぜ？」

瀬良の言葉にはととする津浪。

もう既に6点取られていた。

「なぜ、何故お前はこんなに強い？いつからだ？実力を隠し俺達に付き合っていたのは！」

「！！！！！！陵駕、どう言うことだ？わけがわかんねえよ！」

津浪の言葉に叫ぶ木場氏、大神も瓦屋も同じ気持ちだった。

「悪い、、最初からだ！」

その瀬良の言葉に全員がガクつとした。

そしてその後も続けるが結局100。

瀬良は焰咲に行くため転校をその日にした。

そして残りの4人は試合には向かわず瀬良との最後の別れをした。

「そんなことがあったんだな。」

暗くなる校長に瀬良が

「わりいな！でもそのあと俺は高校で全国優勝の最優秀選手なった
しいいジャン！そのあとすぐに、高校でのJBLだぜ？すげえだろ
！ま、陵駕！話の続きはあとでいいだろ？やりてー事があんだ！」

「ん？まあいいが、やりたい事って？」

「おい！沖田君！コートに入りな！」

にこつと言った瀬良だがすぐに真顔になり言った。

「俺が本物のロール風魅してやるぜ！あんなのでロールの風ってい

わねえからな！あれは、俺の高校で編み出した最強のドリブルだから！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1006a/>

アシスト

2010年11月25日02時51分発行